

ホスピタルアート・癒しの力

小笠原まき 10月31日(土)～12月20日(日)



香美市立美術館

時 間：9時～17時(入館は16時30分まで)

場 所：香美市立美術館 展示室

休館日：毎週月曜日

※ 11月23日(月)は祝日のため開館し、翌日は休館します。

入館料：一般600円

※ 市民の方は無料(住所が確認できるものをご提示ください)

【関連企画】 場所：展示室

◆ 小笠原まきギャラリートーク

10月31日(土) 14時～

◆ 館長または学芸員による作品解説

会期中毎週日曜 14時～

◆ 土佐山田・あーとリンクvol.6(スタンプラリー)

10月31日(土)～11月8日(日)

この企画展では、日々、病と戦う人々に芸術の癒しの力で寄り添う小笠原まきの活動をご紹介します。
各地の病院・医療センターでの壁画制作やワークショップなど、小笠原まきによる多面的な活動が、多くの人々を励まし、生きる力に繋がっています。
このようなホスピタルアートの力を、皆さんにもぜひ見ていただきたいと思ひます。

(香美市立美術館)

【小笠原まき による展示作品(一部)】



▲ 高知医療センター壁画



▲ 高知大学医学部附属病院壁画(部分)



▲ 愛育病院小児科外来

香美市森林環境税活用事業

香美市の赤ちゃんに『木のギフト』をプレゼントしています！

かみんぐBABY木のギフト

『木のギフト』お便り紹介

いっちゃん

素敵な積み木をギフトでいただきました。おすわりが出来ようになった長女は、積み木を手を持ちたり、叩いて音を出してみたり、2歳上のお兄ちゃんと大喜びで遊んでいます。

積み木から木のいい香りがして、大人も子どもも癒されています。



香美市から木のギフトを受け取られた皆さまのご感想、写真を募集しています。投稿者の氏名、写真、写真に映っている方の名前(ペンネームで構いません)とご感想を、下のメールアドレスまでお送りください。

『木のギフト』のプレゼントを希望される方は、新生児訪問の際にお渡しするパンフレットまたは、香美市ホームページ内の特設ページをご覧ください。

【問い合わせ先】 農林課林政係 ☎52-9283 ✉rinsei@city.kami.lg.jp



◆ 一般投稿作品 ◆

広報委員会 選

早すぎるテレビテロップ生身魂
西日映えゲートの下は虹の海
秋の宿白き貝殻細工かな

明石 菲生
五百蔵利美
キ ッ カ

傘寿近人生峠猛暑越え
鬼灯のようよう鳴りし夕べかな

久保 和子
竹村 咲子

戦なき世は叶はぬか星流る
歌いだすつくつくぼうし息止めず

中村 定子
な ず な

梨摘果重き三脚ふりまわし
真つ青なツユクサを見た野の小道

島山 千江
原 茂

悲しいね傘寿の足は西瓜食む
踏み入れば蓮一輪の浄土なり

前田 裕子
宮地 美代

◆ つくし句会 ◆

涼風や白板光り見えぬ赤
秋立つやヒコキ雲の白き線
新月に光り流るる願ひ事
カミーティア星降る里に友を呼ぶ

伊藤 清子
中屋利恵子
野崎 りつ
高岡 栄二

◆ かほく俳句会 ◆

小鳥きて庭の草木も吾の家族
秋刀魚焼く匂いだけでも顔が向く

高橋 梅尾
田島 基宏

内庭を掃き清めたる迎へ盆

乾 真紀子

一人居の来し方もなく火取虫
大西瓜切り分く夫の手を借りて

北岡 途子
佐竹 洋子

秋深み鳥騒がしく飛ぶ日あり
七夕や幾度願ひを書ひたやら

津田吾燈人
長崎万里子

燈籠をダム湖に置けばひたひたと
丸茄子の紫深し酢味噌あへ

野村 里史
前田 桂子

酔眼に屋根より出づる盆の月
昨夜は雨色鮮やかに今朝の秋

宮崎ただし
山崎かずみ

にいにい蟬英語授業へ入り込む

山崎 鈴子

俳句・短歌の投稿方法

▼ 投稿方法は自由。住所、氏名、電話番号を明記してください。

▼ 俳句は偶数月、短歌は奇数月に掲載します。掲載月の前月の1日までに投稿してください。

〒782-8501 (住所記載不要) FAX 53・5958
総務課内広報委員会事務局(俳句・短歌)係

今月のキラリ

早すぎるテレビテロップ生身魂

お盆には故人の霊を供養するばかりでなく、生きている父母や目上の人に対しても礼を尽くす。敬うべき年長者のことを生身魂と呼び、食物を贈るなどして、もてなすことも生身魂という。元来、盆はめでたい日でもあった。生身・しょうぼんとも言う。生身魂の御自身の現状をユーモラスに表現した、軽みの一句。

◎ 季語：生身魂【秋】

踏み入れば蓮一輪の浄土なり

蓮の花は夜明けに開き、昼前にはしぼむ。朝の散歩などでふだんよく行く、自然豊かな菩提寺でしようか、一步踏み入ると一輪の蓮の花が咲き、清らかな浄土のように感じた作者。その情景を詠った、凜とした一句。

◎ 季語：蓮【夏】

秋立つやヒコキ雲の白き線

秋立つは立秋まもなくのころを言う。その頃には、秋へ向かう気配がどことなく感じられる。水の流れ、風の音、雲の高さに秋が来たという感じがする。そんな空をふと見上げた作者は、ヒコキ雲の白き線を見つけた。その一瞬を鮮やかに詠まれ、荒井由美(ユーミン)の『ひこうき雲』の歌詞とメロディーを彷彿とさせる一句。

◎ 季語：秋立つ【秋】